

平成 27 年 11 月 15 日

一遍上人の安仁神社参拝ルート of 考察

先史古代研究会 丸谷憲二

1 はじめに

一遍上人の安仁神社参詣は正安元年（1299）である。一遍上人参詣当時の安仁神社に関する調査報告は無い。一遍上人の参詣した正安元年（1299）の参拝ルートを考察したい。『吉備温故秘録』の邑久郡の説明に、玉島、小島、東幸島が記録され、「東幸島 西幸島は東片岡村の内、南幸田村にあり。古へは神島の字を用ゆといふ。元海中なりしが、貞享年中（1684～1687）新田となる。」とある。

現在の地形は江戸時代の岡山藩の干拓事業により陸地となった。当時は島であり鶴山の麓までが海であった。一遍上人は吉備の穴海を小舟を使用して参拝している。



2 正安元年（1299）一遍上人参詣時の安仁神社鎮座地

『続日本後紀』の承和 8 年(841)2 月 8 日の「備前国邑久郡安仁神預=名神一焉」が初見であり、延期式の名神大社であり備前国の一の宮である。

『備陽国誌』に、「康永三年（1344）四月火災、此時記録等焼失せり。古は社頭壮麗、神事嚴重にして勅使下向の規式あり、今に社頭の北の方に勅使屋敷の跡あり。中比社領も凡千三百石計有し由。金吾中納言秀秋の時、社領を没収す。其後輝政君の御時、社領五石御寄附あり。」と記録されている。

つまり、一遍上人参詣時の安仁神社社殿は、841～1344 年迄の 500 年間存続していた。しかし、1344 年に火災消失、備前岡山藩主の小早川秀秋（1582～1602）による社領没収。宝永二年（1705）池田綱政現在地に遷宮である。小早川秀秋の社領没収は安仁神社の格式の高さとのトラブルと推定している。1600～1705 年が安仁神社不遇の時代であり、記録を発見できない。

2.1 小林久磨雄説 中古・尾の上（鶴山の北方）に遷座

『邑久郡誌 第二編』に、「中古・尾の上（鶴山の北方）に遷座」とある。中古とは『続日本後紀』の承和 8 年(841)以前であろう。木村堅一氏の鶴山山頂での「祭祀を行うに適した大岩発見」報告があるが岩座発見報告ではない。「旧社地は見つからぬ。」とある。尾の

上は、(鶴山の北方)とあり北方の鎮座地を推定したい。

2.2 北方の鎮座地、今の稲荷の処説



『改訂 邑久郡史下巻』説の「古の本殿は山上にあり、戦国の時麓に遷す。今の稲荷の処なり」の、今の稲荷の処なり説では、康永三年(1344)四月の火災により、今の稲荷の処へ移転したことになる。この記述は疑問であり、「今の稲荷の処」とは、現在地ではなくて、一遍上人の時代の安仁神社鎮座地と考えるべきである。

3 ニノ鳥居跡の石柱

神社と寺院との最大の違いは鳥居の有無である。鳥居の中心軸上のはるかかなたの山中に神社がある。『安仁神社御由緒調査書』に、大正時代には「木鳥居柱が藤井村字内浜ト云田地ノ中ニ残立セリ。此者往古当社へ参詣せる道の口に建たる大鳥居なり」とあるが、現在は無い。「二ノ鳥居の跡とて田地の中に真石の柱二本立て標とせり」とある。

麻御山(おみやま)神社本殿は、参道から左90度の方向である。野崎豊氏は古くからある神社の参拝建築形式と教示される。真石の柱二本の間に見える鶴山へ突き当り、左90度の方向が北方である。北方に保食神社がある。



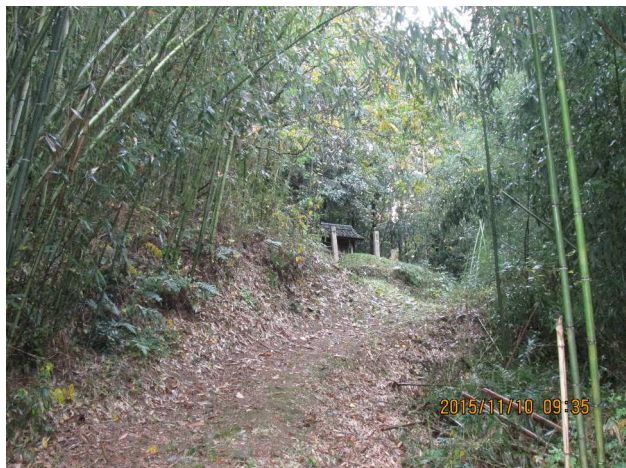
3.1 保食神社

保食神社は、現在は牛神社として横江地区で祀られ、藤井篤氏宅の前方に鎮座している。

3.1.1 保食神と月夜見尊『日本書紀』

『日本書紀』の「太陽と月が昼と夜とに別れて出るようになった話。」は良く知られている。保食神(うけもちのかみ)は、『日本書紀』にのみ登場する神である。天照大神は月夜見尊(つくよみのみこと)に、葦原中国(あしはらのなかつくに)にいる保食神という神を見てくるよう命じた。月夜見尊が保食神の所へ行くと、保食神は、陸を向いて口から米飯を吐き出し、海を向いて口から魚を吐き出し、山を向いて口から獣を吐き出し、それらで

月夜見尊をもてなした。月夜見尊は「吐き出したものを食べさせるとは汚らわしい」と怒り、保食神を斬ってしまった。それを聞いた天照大神は怒り、もう月夜見尊とは会いたくないと言った。それで太陽と月は昼と夜とに別れて出るようになった。天照大神が保食神の所に天熊人（あめのくまひと）を遣すと、保食神は死んでいた。保食神の屍体の頭から牛馬、額から粟、眉から蚕、目から稗、腹から稲、陰部から麦・大豆・小豆が生まれた。天熊人がこれらを全て持ち帰ると、天照大神は喜び、民が生きてゆくために必要な食物だとしてこれらを田畑の種とした。



3.1.2 食物起源神話とハイヌウェレ型神話

この説話は食物起源神話であり、東南アジアを中心に世界各地（大洋州・中南米・アフリカ等）に見られるハイヌウェレ神話型説話である。世界各地に見られる食物起源神話の型式の一つで、殺された神の死体から作物が生まれたとするものである。死体化生神話は奄美大島に昔話として伝承されている。日本神話に挿入されたのは、一旦中国南方部を経由して日本に伝わった話ではないかと考えられている。この神話は渡来人の故郷の神話である。

3.1.3 天孫降臨と保食神

「騎馬民族には独特な食神思想がある。」「天孫降臨という行動形で最も端的に現れてくる。」と武智鉄二氏は説明している。天孫降臨とは、高い山の頂きに天帝の使者が降り立つという出現方法である。山頂からの国見は、保食神にとって一番重要な事項である。生き抜くための食材の発見である。騎馬民族は保食神として日本へ渡来・侵攻している。

3.1.4 岡山県の保食神

『岡山県神社誌』により保食神、保食命を主祭神・末社とする神社名を調査した。岡山市 11 社、瀬戸内市 8 社と瀬戸内市周辺に集中している。この分布を史実として捉えたい。保食神（騎馬民族）の吉備国での記録である。

4 勅使屋敷跡

『安仁神社御由緒調査書』に、「従本宮距離三町子丑ノ方本村ノ内字ナ御堀ト云田地ノ中ニ一魂式坪計リノ地所残跡セリ。此は往昔当社へ勅使を立給ひし時の説ありし旧跡なり。」と。勅使屋敷跡、御堀ト云田地跡はまだ発見できない。

5 まとめ

社殿の創建は平安時代中期以降とされている。当時は仮設の本殿であり、現在の神社本殿とは異なる。本殿の創始は天武朝（673～680）と推定される。式内社は律令制の衰退とともに財政基盤を失なったと説明される。

一遍上人参詣時の安仁神社社殿は、保食神社（うけもちのかみ）鎮座地と推定される。周辺を調査すれば、1344年の火災跡が発見されるはずである。

一遍上人は小舟を使用して、現在の水門港から参拝している。参拝ルートは全て遥拝所である、亀石社、神前神社、乙子神社、麻御山神社、松江伊津岐神社、瀧神社、保食神社・安仁神社、綱掛石神社、片岡別宮、伊登美宮のコースであろう。

5.1 一遍上人参詣時の安仁神社社殿の推定

一遍上人は弘安十年（1288）に備後一宮吉備津神社を参拝している。備前一宮安仁神社も類似した神社建築と推定される。



5.2 夏至の太陽



「吉備の中山」の吉備津彦神社、備後一宮吉備津神社は、夏至（太陽の力が最も強い日・6月21日）の日出に太陽が神殿の御鏡を照らすように建てられている。一遍上人参詣時の安仁神社社殿も同一方向である。

5.3 金毘羅神社の鎮座地から当時の海面を推定

金毘羅神社の鎮座地に注目した。何故、微高地に金毘羅神社が鎮座しているのかが今回のテーマ選定理由である。金毘羅神社の鎮座地から当時の海面を推定すると海面は現在より、1～2m高いと推定する。



6 参考文献

- ① 『邑久郡史下巻』 小林久磨雄 昭和29年 邑久郡史刊行会
- ② 『邑久郡誌 第二編』 小林久磨雄 昭和48年 名著出版
- ③ 『邑久郡誌 第三編』 小林久磨雄 昭和 48 年 名著出版
- ④ 「西大寺一宮安仁神社の遥拝所と神武天皇伝承地めぐり」 丸谷憲二 平成 27 年 9 月
- ⑤ 「太伯周辺の神武天皇伝承地」「西大寺一宮安仁神社の遥拝所めぐり」「備前一宮論争調査」 丸谷憲二 平成27年6月23日
- ⑥ 『安仁神社と『一遍上人絵伝』の藤井の政所』 丸谷憲二 平成27年10月20日
- ⑦ 『吉備（黄蕨）国・高嶋宮伝承の解析』 丸谷憲二 平成20年10月28日
- ⑧ 「備前国福岡荘について」『武家時代の政治と文化』 水野恭一郎 昭和 50 年 創元社
- ⑨ 『備陽国誌』 「吉備郡書集成（一）」 昭和 45 年 歴史図書社
- ⑩ 『備前記全』 石丸平七郎定良 平成 5 年 備作史料研究会
- ⑪ 『邑久町史史料編（別冊）邑久郡大手鏡』 平成 20 年 瀬戸内市
- ⑫ 『撮要録』 昭和 40 年 日本文教出版(株)
- ⑬ 『吉備温故秘録』 大沢市太夫椎貞 「吉備郡書集成（七）」 昭和 45 年 歴史図書社
- ⑭ 『国幣中社式内安仁神社御由緒調査書』 大正 14 年 安仁神社社務所
- ⑮ 『幸島新田開拓三百年記念誌』 昭和 60 年 幸島新田開拓三百年記念事業実行委員会
- ⑯ 『社寺建築を読み解く』 相原丈哉 2012 年 ほおずき書籍
- ⑰ 『神社の本殿』 三浦正幸 2013 年 吉川弘文館
- ⑱ 『安仁神社と方位』 木村堅一 『西大寺 第七号』 昭和 56 年 12 月 西大寺愛郷会
- ⑲ 『氣比神宮と黄蕨(吉備)国 保食神(騎馬民族)の軌跡』 丸谷憲二 平成 25 年 8 月
- ⑳ 『日本絵巻大成別巻 一遍上人絵伝』 小松茂美 昭和 53 年 中央公論社
- ㉑ 『古代史深訪』 <http://enkieden.exblog.jp/18979194/>